九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

呉偉業「琵琶行」における白居易「琵琶行」の受容

竹村, 則行
徳島大学教養部 : 助教授

https://doi.org/10.15017/9768

出版情報：中国文学論集. 10, pp.146-177, 1981-11-01. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

呉偉業「琵琶行」における白居易「琵琶行」の受容

竹村則行

一

西暦一六四六年、既に清朝が天下を制して三年目を數える順治三年に、三八歳の呉偉業は、「琵琶行」と題する七言八十六句、六百二言にのぼる長編の古詩を撰している。今、その自序によってこの詩の成立に至る情況を述べると次のようである。

去梅村一里、爲王太常烟客南園。今春梅花盛開、予偶步到此。忽聞琵琶聲、出於短垣叢竹間。循牆側聽、當其妙處、不覺拊掌。主人開門延客。問向誰彈？則通州白在湄子或如父子善琵琶、好爲新聲。須臾花下置酒、白生爲予朗彈一曲。迺先帝十七年以來事、叙述亂離、豪嘈淒切。坐中有舊中常侍姚公、避地流落江南。因言先帝在玉熙宮中、梨園子弟、奏水嬉過錦諸歡、內才人於暖閣、齎鏤金曲柄琵琶、彈清商雜調。自河南寇亂、天顏常慘

然不悦、無復有此樂矣。相與嗚咽者久之。於是作長句紀其事。凡六百二言、仍命之曰琵琶行。

梅村を去ること一里、王太常烟客の南園爲り。今春梅花盛んに開きしに、予偶ま歩して此に到る。忽ち琵琶の聲の短垣・叢竹の間より出づるを聞く。牆を循りて側聽し、其の妙處に當るや、覺えず掌を拊つ。主人、門を開け、客を延く。問ふ、向には誰か彈く？則ち通州の白在湄、子の彧如の父子、琵琶を善くし、好く新聲を爲すなり。須臾にして花下に酒を置き、白生、予が爲に一曲を朗彈す。廼ち先帝十七年以來の事、亂離を叙述して豪嘈淒切たり。坐客に舊中常侍姚公、地を避け江南に流落する有り。因りて言ふ、先帝、玉熙宮中に在りしに、梨園の子弟は水嬉・過錦の諸戲を奏し、內才人は暖閣に於て、鏤金・曲柄の琵琶を齎って、淸商の雜調を彈く。河南寇亂せしより、天顏は常に慘然として悦ばず。復た此の樂有る無しと。相與に嗚咽する者、之を久しうす。是に於て長句を作り、其の事を紀す。凡そ六百二言、仍ち之に命じて琵琶行と曰ふ。

「梅村」は二年前に購入した舊王士騏の別莊であり、今は吳偉業の居宅である。「先帝十七年以來の事」とは、萬歲山に縊死した明の崇禎帝在位十七年以來の國家の覆滅とその後の動亂を指す。則ち、吳偉業は、友人の王太常烟客（時敏）宅でふと耳にした琵琶の名調子をきっかけにして、今は滅んでしまった明朝以來の琵琶の名手である白在湄・彧如の父子、及びかつて明朝に仕えたことのある姚公の語るところに感銘を受け、その事を六百二言の長句にまとめあげたのである。

今、この吳偉業の「琵琶行」詩を、其の內容や押韻を手がかりにしつつ、次の四小段落に區分し、そのそれぞれについて檢討を加えてゆくことにする。

琵琶急響多秦聲　琵琶の急響に秦聲多し
對山慷慨稱入神　對山　慷慨して入神と稱せらる
同時渼陂亦第一　同時に渼陂　亦た第一たるも
兩人失志遭遷謫　兩人失志して遷謫に遭ふ
絕調王康並盛名　絕調の王・康　盛名並び
崑崙摩詰無顏色　崑崙・摩詰　顏色無し
百餘年來操南風　百餘年來　南風を操り
竹枝水調謳吳儂　竹枝・水調に吳儂を謳ふ
里人度曲魏良輔　里人の度曲するは魏良輔
高士塡詞梁伯龍　高士の塡詞するは梁伯龍
北調猶存止絃索　北調は猶ほ存するも絃索止み
朔管胡琴相問作　朔管・胡琴　相問りて作る
盡失傳頭誤後生　盡く傳頭を失い　後生を誤る
誰知却唱江南樂　誰か知らん　却って江南の樂を唱ふを

「對山」「渼陂」はそれぞれ明の康海（一四七五―一五四〇）、王九思（一四六八―一五五一）の號である。共に「秦聲」にたくみな北曲の作者として、また琵琶の名手として盛名を知られていたが、同郷の劉瑾の黨亂に連坐して相

次いで失脚した。「百餘年來」とは、その康海・王九思の活躍及び失脚以來、呉偉業がこの「琵琶行」詩を詠んだ一六四六年までの歳月をいう。「崑崙」は康崑崙、「摩詰」は詩人の王維をいい、共に盛唐の琵琶の名手である。「呉儂を謳ふ」は呉の儂のうたを謳う。北曲に對する南曲をいう。魏良輔（？―？）、梁伯龍（一五二〇―一五八〇）は共に崑曲の全盛を導いた作者であり、南曲の復興をもたらした作者である。この小段落は、明代に活躍した琵琶の名手が今や既に世を去り、その「傳頭」即ち由緒正しい傳統が久しく途絶えていた中で、ゆくりなくもその名調子を善くする白生の父子に出會った驚きと喜びとを述べる。詩全體における導入部である。『呉詩集覽』（巻四上　七言古詩一之上）において靳榮藩は、

首段言、明代多工琵琶者、後頗失傳。而不圖遇之也。

首段言ふ、明代琵琶に工なる者多きも、後に頗る傳を失す。而るに圖らずも之に遇ふなり。

と注している。

今春偶步城南斜　今春偶ま城南の斜を步むに
王家池館彈琵琶　王家の池館に琵琶を彈ず
悄聽失聲叫奇絕　悄として聽き　聲を失して奇絕を叫ぶ
主人招客同看花　主人　客を招きて同に花を看せしむ
爲問按歌人姓白　爲に問へば歌を按ずる人は姓白にして
家住通州好尋覓　家は通州に住み　尋覓を好む

裙褶新更回鶻裝　裙褶　新たに更ふ　回鶻の裝ひ
虬鬢錯認龜玆客　虬鬢　錯り認む　龜玆の客
偶因同坐話先皇　偶ま同坐の先皇を話るに因りて
手把檀槽淚數行　手に檀槽を把りて淚すること數行
抱向人前訴遺事　抱きて人前に向ひて遺事を訴ふ
其時月黑花茫茫　其の時　月は黑く　花は茫茫たり
初撥鵾絃秋雨滴　初め鵾絃を撥けば秋雨滴る
刀劒相磨轂相擊　刀劒相磨し　轂相擊つ
驚沙拂面鼓沈沈　驚沙　面を拂ひて鼓沈沈たり
耆然一聲飛霹靂　耆然たる一聲　霹靂飛び
南山石裂黃河傾　南山　石裂け　黃河傾く
馬蹄迸散車徒行　馬蹄迸り散り　車　徒らに行く
鐵鳳銅盤柱摧塌　鐵鳳　銅盤　柱は摧け塌れ
四條絃上烟塵生　四條の絃上に烟塵生ず
忽焉摧藏若枯木　忽焉として藏を摧くこと枯木の若く
寂寞空城烏啄肉　寂寞たる空城に烏　肉を啄む

轆轤夜半轉咿啞　　轆轤　夜半に轉じて咿啞たり

嗚咽無聲貴人哭　　嗚咽　聲無く　貴人哭す

碎珮叢鈴斷續風　　碎けし珮・叢れる鈴　風に斷續し

冰泉凍壑瀉淙淙　　冰れる泉・凍れる壑　瀉ぐこと淙淙たり

明珠瑟瑟拋殘盡　　明珠・瑟瑟　拋殘し盡くすは

卻在輕籠慢撚中　　卻って輕く籠へ　慢く撚る中に在り

斜抹輕挑中一摘　　斜めに抹で　輕く挑げ　中に一たび摘めば

潨慄颼颼憯肌骨　　潨慄颼颼として肌骨を憯す

銜枚鐵騎飲桑乾　　枚を銜む鐵騎　桑乾に飲み

白草黃沙夜吹笛　　白草　黃沙　夜　笛を吹く

可憐風雪滿關山　　憐れむべし　風雪　關山に滿ち

烏鵲南飛行路難　　烏鵲南に飛ぶも　行路難きを

狖嘯鼯啼山鬼語　　狖嘯き　鼯啼き　山鬼語る

瞿塘千尺響鳴灘　　瞿塘千尺　鳴灘に響く

この小段は、琵琶の彈き手である白生の素姓について述べ、彼の演奏する琵琶の名調子をさまざまの比喩を用いて描寫する。白生は琵琶を彈きながら、「遺事」即ち明朝崇禎帝十七年來の事を述べあげたのであるが、この言葉

には唐の玄宗皇帝の悲話をつづった「開元天寶遺事」を連想させるものがある。次から次へと繰り述べられる琵琶曲の比喩表現については、同一の表題を持つ白居易の「琵琶行」詩との數多くの類似點があるが、そのことは後に章を改めて取上げることにする。ここで吳偉業は、巧みな比喩を用いつつ、明朝覆滅、續いて淸軍入寇の歷史事實を縷々述べ立てたのである。靳榮藩の『吳詩集覽』では、「初撥鵾絃秋雨滴」より「四條絃上烟塵生」までの小段落については、

此段所彈者、風塵四起、其聲猛以厲。　此の段に彈く所の者は、風塵四に起り、其の聲猛く以て厲し。

と注し、續いて「忽焉摧藏若枯木」より「卻在輕籠慢撚中」までの小段落については、

此段所彈者、國破城空、其聲淒以寂。　此の段に彈く所の者は、國破れ城空しく、其の聲淒く以て寂し。

と注し、續いて「斜抹輕挑中一摘」より「瞿塘千尺響鳴灘」までの小段落については、

此段所彈者、北都旣破、南京旋覆。諸王遷播、都無一成、其聲散以哀。

此の段に彈く所の者は、北都旣に破れ、南京旋た覆る。諸王遷播し、都て一の成る無し。其の聲散じて以て哀し。

と注する。いずれも白生父子彈く所の琵琶の彈き語り中に描出された明淸政變の動亂のありさまを述べており、哀切極まる琵琶のメロディーを巧みに詩に表現したものとしては一詩中の壓卷である。

坐中有客淚如霰　坐中に客有り　淚　霰の如し
先朝舊直乾淸殿　先朝舊乾淸殿に直す

穿宮近侍拜長秋　近侍に穿宮して長秋を拜せられ
咬春燕九陪游燕　咬春・燕九には游燕に陪ふ
先皇駕幸玉熙宮　先皇　玉熙宮に駕幸し
鳳紙僉名喚樂工　鳳紙に僉名して樂工を喚ぶ
苑內水嬉金傀儡　苑內に水嬉・金傀儡
殿頭過錦玉玲瓏　殿頭に過錦・玉玲瓏
一自中原盛豺虎　一たび中原に豺虎盛んなる自り
暖閣才人撤歌舞　暖閣の才人　歌舞するを撤む
揷柳停撚素手箏　柳を揷して撚くを停む　素手の箏
燒燈罷擊花奴鼓　燈を燒して擊つを罷む　花奴の鼓

この小段では、坐客中に居合せた明朝の舊臣で曾て乾淸殿の長秋監をつとめたことのある姚中常侍の語り口を通して、明朝の榮華とそれに續く敗滅のありさまが述べられる。卽ち、崇禎帝は曾て玉熙宮中において、「鳳紙」に名を連ねて「樂工」をよび、「水嬉」「過錦」「金傀儡」「玉玲瓏」などの風流の遊びを心ゆくまで樂しんだのであったが、一たび「中原」が淸軍の寇略を受けるや、それらの歌舞管絃の遊びはすっかり途絶え、さびれ果ててしまったのである。この段は、事變の體驗者である先朝の舊臣の口を通して、あわただしい明朝沒落の有樣が述べられており、それだけに描寫はリアルであって、事變前後における明朝の榮華と沒落のコントラストが一層あざやかである。

我亦承明侍至尊　我れ亦た承明に至尊に侍るも
止聞古樂奏雲門　聞くを止む　古樂の雲門に奏するを
段師淪落延年死　段師は淪落し　延年は死し
不見君王賜予恩　君王賜予の恩に見はず
一人勞悴深宮裏　一人勞悴す　深宮の裏
賊騎西來趨易水　賊騎　西より來りて易水を趨る
萬歲山前鼙鼓鳴　萬歲山前に鼙鼓鳴り
九龍池畔悲笳起　九龍池畔に悲笳起る
換羽移宮總斷腸　換羽・移宮は總て斷腸
江村花落聽霓裳　江村に花落ち　霓裳を聽く
龜年哽咽歌長恨　龜年は哽咽して長恨を歌ひ
力士淒涼說上皇　力士は淒涼として上皇を說く
前輩風流最堪羨　前輩の風流　最も羨むに堪へたり
明時遷客猶嗟怨　明時の遷客　猶ほ嗟怨せり
卽今相對苦南冠　卽今　相對して南冠に苦しみ
昇平樂事難重見　昇平の樂事　重び見ひ難し

白生爾盡一杯酒　白生　爾盡くせ一杯の酒
絲來此伎推能手　絲かに來りて此の伎　能手に推す
岐王席散少陵窮　岐王席散じ　少陵窮まる
五陵召客君知否　五陵の召客　君知るや否や
獨有風塵潦倒人　獨り風塵に潦倒するの人
偶逢絲竹便沾巾　偶ま絲竹に逢ひ　便ち巾を沾らす有り
江湖滿地南鄉子　江湖は滿地　南鄉子
鐵笛哀歌何處尋　鐵笛・哀歌　何處にか尋ねん

白生、姚公に次いで、この終段ではいよいよ呉偉業自身の感慨を述べる。この詩全體の主題にかかわる主要部分である。「延年」は漢の武帝の協律都尉に任じられた李延年を指す。「段師」、「(李)龜年」は共に唐の玄宗の樂人であり、琵琶を善く彈いたことで知られる。(高)力士は玄宗の當時に絶大な勢力を誇っていた宦官である。從って、「歌長恨」(長恨を歌ひ)、「說上皇」(上皇を說く)という表現は、明末清初の動亂の體驗を唐の玄宗楊貴妃の哀話になぞらえて言ったものである。更に

萬歲山前鼉鼓鳴　萬歲山前に鼉鼓鳴り
江村花落聽霓裳　江村に花落ち　霓裳を聽く
岐王席散少陵窮　岐王　席散じ　少陵窮まる

という表現は、杜甫（號は少陵）の最晩年の絶句「江南逢李龜年」（江南に李龜年に逢ふ）詩に言う

岐王宅裏尋常見　岐王の宅裏に尋常に見る
崔九堂前幾度聞　崔九の堂前に幾度か聞く
正是江南好風景　正に是れ江南の好き風景
落花時節又逢君　落花の時節　又君に逢ふ

を踏まえたものであるし、白居易の「長恨歌」に言う

漁陽鞞鼓動地來　漁陽の鞞鼓　地を動して來り
驚破霓裳羽衣曲　驚破す　霓裳羽衣の曲

を連想させる表現である。

この部分は、明清の動亂を描くのに、盛唐の安史の亂を引合いに出している點が特に注目される。その意味するものの詳細については後述する。

一人勞悴深宮裏　一人勞悴す　深宮の裏
賊騎西來趨易水　賊騎　西より來りて易水を趨る
萬歲山前鼙鼓鳴　萬歲山前に鼙鼓鳴り
九龍池畔悲笳起　九龍池畔に悲笳起る

の部分は、清軍の入京とそれに伴なう明朝の悲劇を述べる。崇禎帝は清軍の入寇に打つすべもなく、萬歲山上にお

いてあえなく縊死したのであった。

我亦承明侍至尊　我れ亦た承明に至尊に侍る
一人勞悴深宮裏　一人勞悴す　深宮の裏(うち)

の部分は、明朝における呉偉業の官僚としての履歴を回想する。「承明」は承明廬。漢代、侍従の臣の宿泊所であった。順治三年のこの時、呉偉業は既に前年に福王の下で拝受した少詹事の官を辭任して歸郷し、隱棲生活をはじめているのであるが、それより以前、一六三五（崇禎八）年には北京において實錄纂修官となり、翌々年には東宮講讀官を拜受しており、また一六四〇（崇禎十三）年には中允論德となっている。

前輩風流最堪羨　前輩の風流　最も羨むに堪へたり
明時遷客猶嗟怨　明時の遷客　猶ほ嗟怨せり
卽今相對苦南冠　卽今　相對して南冠に苦しむ
昇平樂事難重見　昇平の樂事　重(また)び見(あ)ひ難し

の四句は、今や落魄して清朝の天下を「南冠」卽ち囚われ人として漂浪する呉偉業の「怨み」を述べており、明の遺民としての呉偉業の意識を濃厚に示した部分である。「遷客」とは、白居易の「琵琶行」序に「是夕始覺有遷謫意」（是の夕始めて遷謫の意有るを覺ゆ）とあることからもわかる様に、「明時」卽ち明朝の榮華からドロップアウトされた呉偉業自身の悲哀をあらわした語である。

以上のあらましの檢討によって、我々は、呉偉業の「琵琶行」詩は、今や廢れた北調の琵琶の名手に偶然に出會

った驚きと喜びとを述べ、また、かつての明朝の舊臣である姚公の身上話をないまぜつつも、その詩作の主要意圖は、實は、明朝なきあと一人天下をさまよう吳偉業自身の「遷客」としての怨みを吐露することにあったことを見てとることができる。

二

以上に見てきた吳偉業の「琵琶行」に先行する作品として、中唐の詩人白居易（七七二―八四六）の「琵琶行」[2]がある。元和十（八一五）年、宰相武元衡の暗殺事件の眞相究明を訴える上書がたたって、四四歲の白居易は九江郡の司馬という閑職に左遷された。翌年の秋、かの地において客をさびしく湓浦のほとりに送った際、ふと漏れてきた琵琶の名曲を耳にする。やがて、彈き手である女の語る華やかな長安の妓女から今は茶商の婦に轉落してしまった不幸な境遇に感動し、あわせて「遷謫」された身の上である自分の境涯をかえりみて、七言八十八句、六百一十六言の長編古詩「琵琶行」は生まれた。この白居易の「琵琶行」詩の成立に至る背景もまた、先に述べた吳偉業「琵琶行」詩の成立に至る背景と酷似するものであり、兩者は共に、舊時の榮華を偲ばせる琵琶の名調子にかりて、社會からドロップアウトされた現在の自分の悲哀を縷說する點において共通する。紙幅の關係もあってここにくだくだしく再錄することは避けなければならないが、その後の中國文學をはじめ、我が國の平安時代文學へも甚だ大きな影響を與えた[3]白居易のこの長編の古詩は、その詩作に至る背景のみならず、表面にあらわれた措辭表現についても、吳偉業の「琵琶行」詩との數多くの類似點、あるいは共通點を發見することができる。それは例えば、

白居易が「琵琶行」の序文の終りを、

因爲長句、歌以贈之。凡六百一十二言(4)、命曰琵琶行。

因りて長句を爲り、歌ひて以て之に贈る。凡そ六百一十二言、命じて琵琶行と曰ふ。

と結ぶのに對し、呉偉業は、

於是作長句、紀其事。凡六百二言、仍命之曰琵琶行。

是に於て長句を作り、其の事を紀す。凡そ六百二言、仍ち之に命じて琵琶行と曰ふ。

と描寫していること。白居易「琵琶行」詩の序文に、

是夕始覺有遷謫意。　是の夕始めて遷謫の意有るを覺ゆ。

と述べるのに對し、呉偉業「琵琶行」詩第四句に、

兩人失志遭遷謫。　兩人志を失ひ、遷謫に遭ふ。

と述べること。白居易「琵琶行」詩第九句に、

尋聲闇問彈者誰。　聲を尋ねて闇に問ふ、彈く者は誰ぞ。

と述べるのに對し、呉偉業「琵琶行」詩の序文で、

問向誰彈。　問ふ、向(さき)に誰か彈く。

と述べること。白居易「琵琶行」詩第二五句に、

嘈嘈切切錯雜彈。　嘈嘈切切、錯雜して彈く。

と述べるに對し、吳偉業「琵琶行」詩の序文に、

紱述亂離、豪嘈淒切。　亂離を紱述して豪嘈淒切たり。

と述べること。白居易「琵琶行」詩第六句に、

別時茫茫江浸月。　別るる時茫茫として江、月を浸す。

と述べるに對し、吳偉業「琵琶行」詩第二六句に、

其時月黑花茫茫。　其の時月黑く花は茫茫たり。

と述べること。白居易「琵琶行」詩第二一句に、

輕攏慢撚抹復挑。　輕く攏へ慢く撚り、抹でて復た挑ね。

とあるのに對し、吳偉業「琵琶行」詩第四三、四四句では、

卻在輕籠慢撚中、斜抹輕挑中一摘。

卻って輕く籠へ慢く撚る中に在り、斜めに抹で輕く挑ね、中に一たび摘む。

とあること。白居易「琵琶行」詩第二六句に

大珠小珠落玉盤。　大珠小珠、玉盤に落つ。

とあるのに對し、吳偉業「琵琶行」詩第四一句に、

明珠瑟瑟拋殘盡。　明珠瑟瑟、拋殘して盡き。

とあること、白居易「琵琶行」詩第二八句に、

幽咽泉流氷下難。[5]　幽咽せる泉流、氷下に難む。

とあるのに對し、呉偉業「琵琶行」詩第四十句に、

氷泉凍壑瀉淙淙。　氷れる泉、凍れる壑、瀉ぐこと淙淙たり。

とあること、等等である。[6]

今、白居易「琵琶行」と呉偉業「琵琶行」におけるこの表現の類似性を見ても、呉偉業はその「琵琶行」詩の製作において、同じく琵琶の名曲に藉りて己の流謫の悲哀を述べた白居易の著名な「琵琶行」詩を、その意識裡においていたことが一層はっきりとしてくるであろう。

三

しかしながら、白居易と呉偉業の「琵琶行」詩は、そのような詩作の動機、構成上の一致や個々の表現上の類似點が多數あるにもかかわらず、詩全體としてその中に描き出された世界を相互に比較してみた場合には、類似點よりもむしろ相違點の方が顯著に眼にうつってくるのである。ここでは、その一例として、兩詩に共通する主題にかかわる最大のポイントである「我」の現れ方、卽ち兩詩において自分自身はどのように描き出されているか、特にその「遷謫の意」との關連について比較檢討してみることにする。

白居易詩の場合、白居易が茶商の女の琵琶の彈き語りに感動しつつ、「遷謫」された者としての自分の思いを述べる部分は次の箇所である。

我從去年辭帝京　我　去年　帝京を辭してより
謫居臥病潯陽城　謫居して病に臥す　潯陽城
潯陽小處無音樂　潯陽は小處にして音樂無く
終歲不聞絲竹聲　終歲　絲竹の聲を聞かず
住近湓江地低濕　住は湓江に近くして地は低濕
黃蘆苦竹繞宅生　黃蘆　苦竹　宅を繞りて生ず
其間旦暮聞何物　其の間　旦暮に何物をか聞く
杜鵑啼血猿哀鳴　杜鵑は血に啼き　猿は哀鳴す
春江花朝秋月夜　春江の花朝　秋月の夜
往往取酒還獨傾　往往　酒を取り　還た獨り傾く
豈無山歌與村笛　豈に山歌と村笛と無からんや
歐啞嘲哳難爲聽　歐啞・嘲哳　聽くを爲し難し
今夜聞君琵琶語　今夜　君が琵琶の語を聞きて
如聽仙樂耳暫明　仙樂を聽くが如く　耳暫く明かなり
莫辭更坐彈一曲　辭すること莫かれ　更に坐して一曲を彈くを
爲君飜作琵琶行　君が爲に飜して琵琶行を作らん

主觀の表出という點からすれば、詩は全て何がしか自我の表出されたものであるのだが、ここでは押韻の關係から、特にこの部分に限って自傳的描寫の濃い部分であると認定する。京・生・鳴・明・行はそれぞれ下平聲第十二庚の韻字、城・聲・傾はそれぞれ下平聲第十四清の韻字であり、これらは同用。(但、聽のみは下平聲十五首に屬する。)

安史の亂による國家の動亂を經驗し、科擧による官吏登用制度が有效に且つ實質的に機能しはじめた中唐にあって、全體として見ればその一生をほぼ順調にたどった白居易の七十五年間の生涯において、元和十年の宰相武元衡の暗殺事件に端を發する江陵左遷事件がもたらす意義は甚だ大きい。かつて漢の司馬遷は「太史公自序」において〝發憤著書〟の說を披瀝し、唐の韓愈は「送孟東野序」において〝不平則鳴〟の說を唱えた。さらに、宋の歐陽修は「梅聖俞詩集序」において〝愈窮愈工〟說を開陳し、近來の魯迅は「吶喊自序」において、急落した者のみに見える獨自の視野について記している。これらの事例は、時代、人共に異なり、また表現も同一ではないが、その言わんとするところは共に同じ一點を指向している様に私には思える。白居易四四歲の時に起きた江陵左遷の體驗もまた、白居易にとっては實に大きな〝不平〟〝窮迫〟の體驗であり、〝發憤〟のひきがねとなるものであったであろう。そしてそれは、同時に彼を詩人として開眼させるのにも大きく貢獻したのであり、白居易が「詩魔」の概念を發見し、「詩人薄命」の認識を新にしたのも、またこの江州の地においてであった。(7) しかしながら、この左遷事件は、白居易にとってそのような詩想開眼の重要な契機であったにもかかわらず、「琵琶行」詩中に現れた自己描寫に限って言えば、今日から考えるに、それでもまだかなりの甘さを內包している點を見のがすわけにはいかない。

その甘さとは、端的に言えば、白居易の不幸とはつまるところ彼一身上に關わる不幸であって、彼を取巻く國家機構そのものは十分に安泰であり、かつ十分に信頼し得るものであったということである。かつて楚の屈原が嘆息したように、かりに佞臣輩が明主の明智を蔽い遮る様なことがあったとしても、君主そのものは常に賢明であり、士大夫の據り處となるに十分な確固とした存在であった。このような時にあって、白居易は、要するに自分の境遇についてのみ關心を持てばよかったのであり、中央政界に巣くう佞臣に義憤を感じ、上書をしたためて直訴するという直接行動に出ることはあっても、國家はつねに安泰であり、國家基盤そのものの滅亡、瓦壊といったことにまで思いを馳せる時代情況ではなく、從って白居易にその必要はなかった。

これに對して、時代はかなり下るが、明清の鼎革時を生きた吳偉業はそうではない。吳偉業の場合、その人生上における最大のショッキングな事件は國家の覆滅であった。自らの據って立つ存在基盤の崩壞であった。三六歳時を頂點として起きたこの體驗は、その後の彼の一生を完全に規定してしまったのである。晩年にやむなく清朝に出仕して節を汚した彼であるが、その一生を「吾が一生の遭際は萬事憂危にして、一刻として艱難を歷ざる無く、一境として辛苦を嘗めざる無し。實に天下の大苦人爲り」[8]とふりかえり、自分の墓碑には「詩人吳梅村之墓」とのみ刻するように遺言して逝ったという事實は、彼の眼が終生この鼎革事件に向けられていたことを象徴的に物語る。ただ、このような事件は、その事柄の性質上、一朝に成り一夕に終るものでは決してない。必ずや、それに至る長い前提があるものであるし、また尾を引く長い收束の時間を要するものである。崇禎帝の自縊という事件こそは、その在位十七年目の三月に起きたのであり、故に史家はこの年、一六四四年を以て明から清への轉換點に設定す

る。私はそのことにあえて異論をさしはさむものではないが、國家體制そのものが名實共に清朝へと移行するには、かなり多くの時間を要したであろうことは言うまでもない。それ故に、呉偉業の「琵琶行」詩が書かれた順治三（一六四六）年は、明清の轉換期のまっただ中にあったと言ってさしつかえないであろう。

このような情況下に書かれた「琵琶行」詩の中で、呉偉業が自らを語った自傳的描寫の部分は次の箇所である。

我亦承明侍至尊　　我れ亦た承明に至尊に侍るも
止聞古樂奏雲門　　聞くを止む　古樂の雲門に奏するを
段師淪落延年死　　段師は淪落し　延年は死し
不見君王賜予恩　　君王賜予の恩に見はず
一人勞悴深宮裏　　一人勞悴す　深宮の裏
賊騎西來趨易水　　賊騎　西より來りて易水を趨る
萬歲山前鼙鼓鳴　　萬歲山前に鼙鼓鳴り
九龍池畔悲笳起　　九龍池畔に悲笳起る
換羽移宮總斷腸　　換羽・移宮は總て斷腸
江村花落聽霓裳　　江村に花落ち　霓裳を聽く
龜年哽咽歌長恨　　龜年は哽咽して長恨を歌ひ
力士淒涼說上皇　　力士は淒涼として上皇を說く

前輩風流最堪羨　前輩の風流　最も羨むに堪へたり
明時遷客猶嗟怨　明時の遷客　猶は嗟怨せり
卽今相對苦南冠　卽今　相對して南冠に苦しむ
昇平樂事難重見　昇平の樂事　重び見ひ難し

この部分十六句は、韻の關係から言って四句ずつの四小段に分かれる。尊・門は上平聲第二三魂、恩は上平聲第二四痕の韻字であり、それぞれ同用。裏・起は上聲第六止、水は上聲第五旨の韻字であり、それぞれ同用。腸・裳は下平聲第十陽、皇は下平聲第十一唐の韻字であり、それぞれ同用。さらに、見は去聲第三二霰、羨は去聲第三三線の韻字であり、これらは同用であるが、怨は去聲第二五願に屬し、韻をふみはずす。これを見ると、「琵琶行」詩に描かれた吳偉業の悲哀は、白居易の様に單に一個人の流謫のみをうたうものではなく、それをも包含しつつ、國家の滅亡の中に翻弄される一個人の悲哀を描寫する性質のものであったことが一層はっきりとしてくる。「賊騎西來趨易水　萬歲山前鼙鼓鳴」とは滿州軍の侵寇を描寫したものであるし、「卽今相對苦南冠」とは、その屈辱の中で「南冠」卽ち虜囚としての怨みに甘んじて生きる吳偉業の「苦しみ」を詠んだものであることは既に述べた。

このように、同じく「琵琶行」と題する白居易と吳偉業の長編古詩であるが、兩者が生きた時代情況の差を配慮すれば、輕々に一方の優劣を論じることはできない。(9) 詩が詠まれた當時の詩人の心の働きを思うならば、一方が優れて一方はそうでないというような安易な評價そのものが、實は何の意味も持たなくなってくるのである。ただ、そうした點を顧慮しつつも、吳偉業の「琵琶行」について、白居易の「琵琶行」と對照しつつ、その特徵をあげる

ならば、次の一點は顯著であろう。それは卽ち、吳偉業の詩には、白居易とは違い、國家の滅亡がうたわれているということである。

このことは、實はひとり「琵琶行」詩についてのみ言うことではない。明清の變革期に生きた詩人が、その自ら見聞した事實を詩中に詠み込んだ時、その詩には必然的に明清の鼎革における歷史事實が同時に詠み込まれたのであった。吳偉業の他の詩篇にも、到るところにこの種の社會事實が反映されている。社會詩として有名な「避亂」「哭志衍」「送何省齋」「攀淸湖」「永和宮詞」「雒陽行」「蕭史靑門曲」「雁門尙書行」「松山哀」「臨淮老妓行」「圓圓曲」等々の詩篇は、いずれもその例である。このことはまた、吳偉業の詩をして、かつて安史の亂を體驗した杜甫の詩がそうであったように、「詩史」と評する論者が出現する所以でもあった。(10)

四

吳偉業詩は、これまでしばしば白居易詩と關連づけて論じられて來た。例えば、淸の查爲仁はその著『蓮坡詩話』の中で、

梅村最工歌行。若永和宮詞・蕭史靑門曲・圓圓曲等篇、皆可方駕元白。

梅村は最も歌行に工なり。永和宮詞・蕭史靑門曲・圓圓曲等の篇の若き、皆元白に方駕すべし。

と述べており、ここで查爲仁には、吳偉業の歌行體の詩を元稹、白居易のそれに匹敵するものだと評している。その他、吳偉業詩の注釋書である『吳詩集覽』(卷一上　五言古詩一之上)の中で、著者の靳榮藩が、

梅村以七古五七律擅場。然七古佳篇可參長慶一席。

梅村は七古、五七律を以て擅場す。然して七古の佳篇は長慶の一席に參ずべし。

と述べるのも同様の評價である。『吳詩集覽』（卷四上　七言古詩一之上）には、又、張如哉の說を引き、

永和宮詞・琵琶行・女道士彈琴歌・臨淮老妓行・王郎曲・圓圓曲、雖有與元白名篇酷似處、然非專仿元白者也。

永和宮詞・琵琶行・女道士彈琴歌・臨淮老妓行・王郎曲・圓圓曲は、元白の名篇と酷似する處有りと雖も、然れども專ら元白を仿る者に非ざる也。

と述べている。ここでは、「琵琶行」をも含めた吳偉業詩の名篇について、元白詩と酷似する點を確認しつつも、さらに吳偉業詩自身の持つ獨創性を强調しようとする態度が示されている。

今これらの中で、吳偉業詩と白居易詩との連關を七言絕句體を用いて巧みに言い表したものが、かの清代における性靈派の首領となった袁枚（一七一六―一七九七）の撰した「元遺山の論詩に倣ふ」詩である。全て三十八首あるうちの第二首は次のように吳偉業について論じる。

生逢天寶亂離年　生れて天寶亂離の年に逢ひ
妙詠香山長慶篇　香山長慶の篇を妙詠す
就使吳兒心木石　就ひ吳兒をして心木石のごとくなら使むるとも
也應一讀一纏綿　也た應に一讀一纏綿たるべし

『小倉山房詩集』巻二七におさめられるこの詩は、唐の杜甫の「戯れに六絶句を爲る」詩や金の元好問の「論詩三十首」、更には同時代の王士禛の「戯れに元遺山の論詩絶句に倣ふ三十二首」の意を汲む袁枚が、自分の知悉する清代の詩人について、三十八首の絶句で以て論評を試みようとした當代の詩人論である。呉偉業を評したこの詩は、第一首の王新城（士禛）に次いで第二首にあげられており、袁枚の呉偉業に對する關心の深さが讀みとれる。このような論詩絶句體の持つ文學史的意義については、他に十分な專論を必要とするのであるが、袁枚のこの呉偉業評の特徴は、呉偉業を「天寶亂離の年」に生まれ合わせて、「香山長慶の篇を妙詠した」としていることである。今少しくこのことの意味するものについて考えてみようと思う。白居易は中唐の詩人であり、その生沒年は大歴七（七七二）―會昌六（八四六）である。從って天寶年間（七四二―七五五）に生まれ合わせているわけではない。「天寶亂離の年」と言えば、直接には天寶十四載（七五五）、安祿山の叛亂とそれに伴なう唐王朝の動亂を指す。時は盛唐の一時であり、當時詩壇で活躍していたのは白居易ではなく、李白や杜甫を含む盛唐の詩人達であった。（もっとも、李杜詩が高く評價されるのは後世のことに屬する。）從って袁枚のこの詩は、安祿山の亂に喩えて、呉偉業三六歳時の一大事件である明朝の覆滅を言っているのである。これを要するに、呉偉業は、たとえば杜甫が安祿山の亂に遭遇して珠玉の名篇をものしたように、明清の大動亂時に生まれ合わせ、しかもなお、白居易の如き名篇をよくすることができたというのがこの詩に現れた袁枚の呉偉業評の視點である。この詩は、呉偉業の詩を理解するのに、「天寶亂離の年」（安祿山の乱の年）と白居易の詩篇とを組合せて論じている點で大いに注目される。

このように、呉偉業詩を白居易詩との連關においてとらえようとする論者の中で、一六四四年甲申の變の前後に

おける吳偉業の詩風の質的な變化をするどく指摘するものは、『四庫提要』集部別集類二十六における紀昀（一七二四―一八〇五）の次のような記述である。

其少作、大抵才華豔發、吐納風流、有藻思綺合、清麗芊眠之致。及乎遭逢喪亂、閱歷興亡、激楚蒼涼、風骨彌爲遒上。暮年蕭瑟、論者以庾信方之。其中歌行一體、尤所擅長。格律本乎四傑、而情韻爲深。叙述類乎香山、而風華爲勝。

其の少きときの作は、大抵才華豔發し、風流を吐納して、藻思綺合し、清華芊眠するの致有り。喪亂に遭逢し、興亡を閲歴するに及びては、激楚蒼涼として、風骨彌よ遒上と爲る。暮年の蕭瑟、論者は庾信を以て之に方ぶ。其の中、歌行の一體は尤も擅長する所なり。格律は四傑に本づき、而して情韻深しと爲す。叙述は香山に類し、而して風華勝れりと爲す。

ここで紀昀は、晉の陸機の「文賦」に言う「或は藻思綺合し、清麗芊眠たり」という華麗な文學評語を踏襲しながら、「其の少きとき」、即ち明代に作られた吳偉業の詩文について、

大抵才華豔發、吐納風流、有藻思綺合、清麗芊眠之致。

おおむね才智がきらめき、風雅を述べ、文章の構想があや絹のように美しく織りなし、清らかで麗わしくかがやいているおもむきがある。

と評價している。次いで「喪亂に遭逢し、興亡を閲歴す」、即ち明清鼎革の大動亂を體驗した後の吳偉業の詩文については、

激楚蒼涼、風骨彌爲遒上。

澄んだ悲しい聲がさびしく響き、文章の風格がますます雄勁になった。

と述べている。紀昀がここで、呉偉業の特に歌行體の詩篇について、一應は白居易に類するものだとしてはいるものの、「風華」即ち風采と才華が白居易よりも勝っているとするのは、まさしく呉偉業における國家覆滅の體驗が必然的に結果したものにほかならない。紀昀の『四庫提要』における記述は、明清の鼎革事件が呉偉業の詩の質をも變化させてしまったことを鋭く指摘しており、私が今まで「琵琶行」詩について見てきた論述からするならば、「琵琶行」詩における白居易と呉偉業の詩の世界の本質的な差違を見事に剔抉した至言であると言うことができる。

五

以上の考察によって、私は、呉偉業の「琵琶行」詩が、白居易の「琵琶行」詩と同じ表題は持つものの、その生きた時代の特殊性を反映して、己が直接經驗した明清の動亂に伴なう社會事象を詩中に詠み込む點において甚だ特徴的であることを述べてきた。また、このことは、ひとり「琵琶行」のみならず、呉偉業のその他の詩篇にも共通する現象である。それでは最後に、呉偉業詩の持つこのような特徴は、當時の文學思想上において考えてみた場合、どのような意義と役割とを持つのであろうか。

沈德潛（一六七三―一七六九）は、『清詩別裁集』巻一の中で呉偉業について次のように述べている。

梅村七言古、專倣元白、世傳誦之。然時有嫩句、累句。

梅村の七言古は、專ら元白に倣ひ、世に之を傳誦す。然るに時に嫩句、累句有り。

「嫩句」とは若くて未熟な詩句をいい、「累句」とは故事にとらわれて伸びやかでない詩句を指す。沈德潛のこの評語は、吳偉業の特に七言古詩がもっぱら元稹、白居易に倣って作られ、高い世評を受けてはいるものの、時たまその中に嫩句や累句が混入される缺點を指摘したものである。私が本論に取上げた「琵琶行」は、沈德潛がここに指摘する七言古詩であり、沈德潛のこの缺點の指摘は、とりもなおず吳偉業の「琵琶行」詩についてもそのまま當てはまると考えてよいであろう。

次いで民國の王國維（一八七七―一九二七）は、その著『人間詞話』の中で、吳偉業の歌行體詩について次のような論評を加えている。

以長恨歌之壯采、而所隸之事、只「小玉雙成」四字、才有餘也。梅村歌行、則非隸事不辦。白吳優劣、卽于此見。

長恨歌の壯采を以てして、隸する所の事は只だ「小玉雙成」の四字のみ、才に餘り有るなり。梅村の歌行は、則ち隸事に非ざれば辦せず。白・吳の優劣は、卽ち此に于て見る。

王國維のこの評語は、直接には白居易の「長恨歌」と比較しながら、吳偉業の歌行體詩に對して發せられているが、論旨の上からは、白居易の「琵琶行」詩と吳偉業の「琵琶行」詩との比較評價に置きかえても何ら不都合なことではないように思われる。王國維がここで吳偉業詩の短所としてあげている「隸事」とは、詩中に故事をやたら

並べたてることであり、沈德潛のいう「累句」と同義語である。更に、『吳詩集覽』（卷六　上雁門尙書行）では、次のように陸次雲の說を引用して、吳偉業詩の持つ「使事に隱れる」欠點を指摘している。

梅村先生、長歌甚多、率皆琵琶長恨之遺。然用意每隱于使事、亦是詩家一病。

梅村先生は長歌甚だ多く、率ね皆琵琶長恨の遺なり。然るに用意毎に使事に隱るるは、亦た是れ詩家の一病なり。

今ここに、沈德潛が「嫩句」「累句」といい、王國維が「隷事」という評語でもって吳偉業詩の短所を指摘し、あるいは陸次雲が「使事に隱る」と指摘することを、當時の文壇の風潮の中において考えてみるとき、ある興味ある事實に氣がつく。それは、端的に言えば、これらの評語は、とりもなおさず、明淸の文壇に根强い存在としてあった所謂古文辭派の詩文に對して浴びせられた貶辭と同種のものであることである。

吳偉業と古文辭派との結びつきは、早く、そして根が深い。例えば、顧湄の「吳梅村先生行狀」[11]には、

西銘張公溥、見而嘆曰、文章正印、其在子矣。因留受業、相率爲通經博古之學。

西銘張公溥、見て嘆じて曰く、文章の正印は其れ子に在りと。因りて留めて業を受け、相率ゐて通經博古の學を爲す。

とあり、古文辭派の延長線上に位置する文學結社復社の領袖であった張溥（一六〇二―一六四一）が、若き日の吳偉業の詩文を見て、「文章の正統は君にこそ傳わっている」と驚嘆し、門弟として「受業」したことが述べられている。顧師軾『梅村先生年譜』によれば、この時天啓二（一六二二）年、吳偉業はまだ十四歲の弱年であった。ここ

に言う「通經博古の學」とは、卽ち古文辭派の學問を謂う。この張溥との邂逅を契機にして、その後の吳偉業が復社を推進する有力メンバーとして活躍したことはよく知られている事實である。

古文辭派は明清文壇の底流として根强く存在し、またさまざまの流派をなすので、簡略に論じることは實は容易ではない。ここでは當時の古文辭派の實態について詳細に論じる餘裕もなく、その必要もないが、この方面に關する先學の業績を參照しつつ、その主張を要約するとすれば、つまるところ、「文必秦漢、詩必盛唐」（文は必ず秦漢、詩は必ず盛唐）というスローガンの下に功罪ともども集約され得るであろう。功績は則ち士大夫の據るべき詩文のテキストを秦漢の文、盛唐の詩に限定して學びやすくしたことであり、汗牛充棟ただならぬ厖大な量の必讀書に惱まされる後世の士大夫にとって、これは何よりの指針となるものであった。罪過は則ち、このスローガンが裏目に表れて、秦漢の文、盛唐の詩を讀みさえすれば、萬事それで事足れりとする惡しき形式主義の風潮が蔓延したことである。例えば、盛唐の杜甫なら杜甫の詩句を任意にひきちぎり、單に機械的に組合せただけの所謂集杜詩や、その他の集句詩の例を、この時期の文獻に我々は特に數多く見ることができる。この方法では、杜甫の詩はおおむね知的で衒學的な文字の遊びに墮してしまっているのであり、その詩精神は等閑（なおざり）にされていると言わなければならない。袁中郎（一五六八―一六一〇）の「性靈」の主張も、實にこのような當時の文壇の形式主義の風潮に對する一つの强烈な精神面からの見直し運動であったことは言うまでもない。

そして、明末に生を受け、復社の領袖張溥に師事した若年の吳偉業も、この古文辭派の範疇内にあったことは歷然としている。先にあげた沈德潛や王國維、あるいは陸次雲の「嫩句」「累句」「隸事」「使事」等の指摘は、いみ

じくも呉偉業詩の持つ古文辭派的欠陥の側面をたくみについたものにほかならないからである。しかしながら、呉偉業は、いつまでもその範疇内に安住していたわけでは決してない。貴重な經驗というにはあまりにも殘酷な體驗であるのだが、その三六歳時を頂點にして起きた明清鼎革の體驗は、呉偉業にとって、その詩風の變化について見ても、實に大きな轉換點であったのである。ここで、先にあげた『四庫提要』における紀昀の呉偉業評にもう一度もどることにする。紀昀は、明代に屬する呉偉業の詩文について、

才華豔發、吐納風流、有藻思綺合、清華芊眠之致。

才華豔發し、風流を吐納して、藻思綺合し、清華芊眠するの致有り。

という華麗な評語を加えているのに較べ、その清朝以後に屬する詩文については、

激楚蒼涼、風骨彌爲遒上。

激楚蒼涼として、風骨彌よ遒上と爲る。

と評しているが、このことは一體何を意味しているのであろうか。改めて言うまでもなく、「風骨」とは〝風格〟とも譯さるべき氣骨ある詩精神の方面について述べた評語である。そして、私のこれまでの論述によって、紀昀のこの呉偉業評を改めて讀み直すならば、まさしく呉偉業が明清の大動亂をかいくぐることによって、明代古文辭の持つ弊害の側面をかろうじて克服し、かつ凌駕し得たことを裏付けているように私には讀みとれるのである。

註

（1）「五陵召客」は、呉翌鳳『呉梅村詩集箋注』では「五侯賓客」に改め、「本集は五陵召客に作る。疑うらくは非ならん」と注しているが、恐らく誤りであろう。

後に詳しく論じる様に、吳偉業「琵琶行」の本歌になったと思われる白居易「琵琶行」に「五陵年少爭纏頭」という表現が見え、また『梅村家藏藁』では「五陵召客君知否」となっているからである。

（2）「琵琶行」は四部叢刊本その他では「琵琶引」に作る。既に說かれている様に「行」は第八十二句末字の韻字でもあり、「琵琶行」とするのがより正しいと思われる。

（3）白居易詩文の日本文學に與えた影響については次の諸書を參照。

水野平次『白樂天と日本文學』（目黑書店　昭和五年）。

金子彥二郎『平安時代文學と白氏文集』（全三冊　藝林舍　昭和五二年覆刻）。

近藤春雄『長恨歌・琵琶行の研究』（明治書院　昭和五六年）。

（4）六百一十二言は六百一十六言の誤り。

（5）難は四部叢刊本・馬元調本・汪立名本・全唐詩本は灘に作る。氷は四部叢刊本をのぞいて他は水に作る。今、段玉裁『經韻樓集』巻八「與阮芸台書」に論じて「氷下難」を是とするに從う。

（6）白居易の「琵琶行」を論じれば、當然元稹の「琵琶歌」（『元氏長慶集』巻二六所收）にも言及すべきであるが、その詩作の動機からみて、後者と吳偉業「琵琶行」との關連をここでは論外とした。元稹「琵琶歌」と白居易「琵琶行」との關連については次の諸書を參照。

星川清孝「白樂天の『琵琶行』と元微之の『琵琶歌』」（『茨城大學文理學部紀要』（人文科學）第七號　一九五七年）。

陳寅恪『元白詩箋證稿』（上海古籍出版社　一九七八年）。

（7）詩魔の發見及び詩人薄命の認識について次の諸書を參照。

平岡武夫『白居易』（中國詩文選一七　筑摩書房　昭和五二年）。

二宮俊博「白居易に於ける詩人薄命の認識について」（九州大學『中國文學論集』第八號　昭和五四年）。

（8）顧湄「吳梅村先生行」に「吾一生遭際、萬事憂危、無一刻不歷艱難、無一境不嘗辛苦、實爲天下大苦人、（略）墓前立一圓石、題曰詩人吳梅村之墓」とある。

（9）許文雨は『文論講疏』「王國維人間詞話卷上」において、「按ずるに、吳梅村偉業の圓圓曲の如きは、使事

固より多し。亦た時忌に觸るるを避けるに由りて然らしむなり。白樂天の長恨歌は、則ち陳鴻の傳、前に在る有り。故に能く運らすに輕靈を以てす。勢に同じからざる有り。未だ遽かに其の優劣を判ずべからず」という注をほどこしている。吳偉業の「琵琶行」は、本論に說くように白居易の「琵琶行」にならって序をその前においているが、時忌にふれる點では、やはり「圓圓曲」と事情は同じである。

(10) 例えば趙翼『甌北詩話』卷九にその論が二條見えているし、靳榮藩『吳詩集覽』卷六にも陸雲次の說を引用して吳偉業詩を「詩史」であるとしている。なお、徐嘉『顧亭林詩箋』凡例にも顧炎武詩を「實に一代の詩史爲り」としている由、藤井良雄氏にうかがった。これらの明清間の文人における「詩史」の語が持つ意味と、從來杜甫詩に冠せられてきた「詩史」の意味との考察については、別に專論を必要とする。

(11) 靳榮藩『吳詩集覽』より引用。

※ 吳偉業詩、白居易詩の底本は、共に四部叢刊におさめる『梅村家藏藁』、『白氏文集』を使用した。

(附記) この稿は、昭和五六年五月二四日、佐賀女子短大において開催された九州中國學會大會の研究發表をまとめ直したものである。その際、司會の勞をわずらわし、貴重な御意見を賜わった小西昇先生は、信じられないことに間もなく六月二三日、忽焉として不歸の客となられた。先生の生前の御薫陶を偲びつつ、この拙作がその御敎示に十分答え得ぬのを慙みとし、つつしんで先生の御冥福をいのります。